



Title: 図書館員は研修する

❖ 図書館サービスとは何か

図書館の役割って何だろう、と改めて自問することが時々あります。

仮にも司書資格があるので、図書館学の基本的な知識はあるつもりです。図書館のあり方についての決まりや言辞も、多すぎるくらいに溢れています。それでも、自館に引き換えてみると、理想と現実の違いもあり、迷い悩むことがいろいろ出てくるのです。

たとえば公共図書館を規定する法基盤としての図書館法の第3条(図書館奉仕)には、「…土地の事情及び一般公衆の希望に沿い、更に学校教育を援助し、及び家庭教育の向上に資することとなるように留意し、おおむね次に掲げる事項の実施に努めなければならない…」とあり、その後9項目にわたる図書館奉仕(つまり図書館サービス)のメニューが掲げられています。実際のところその9項目を十全に行うことができればすばらしい図書館になるはずですが、完璧な図書館などというものは国立国会図書館も含めてありません。すべての図書館は限られた条件の中で、不全感を抱えながら運営されているものなのです。

このまま話を進めるといつまで経っても終わらない堂々巡りになりそうなので、いったん止めにします。とにかく図書館サービスは、森羅万象に亘る知を分類して収集保存し活用するという、人類の見果てぬ夢を土台にしている、たぶん終わりのない営みなのです。そのことを頭の片隅に置きながら、目の前の仕事に粛々と、あるいはバタバタしながら取り組んでいくのが図書館員というものなのでしょう。あくまでも、地域の利用者のために。

❖ 不断の学びと実行のために

前項の言葉足らずの迷いは、他所の図書館を視察・見学したり、講演を聴いたり、先進的な取り組みを見聞きしたりすると浮かんでくるものです。

市立図書館の指定管理者となった昨年度からの1年余りで、たとえば講演は、私が直接聴いただけで4回あります。講師は、花井裕一郎氏(前小布施町立図書館まちとしょテラソ館長)、早川光彦氏(南相馬市立中央図書館副館長)、内野安彦氏(元塩尻市立図書館長)、石原均氏(八戸市立南郷図書館長)の4名。秋田県内だけでこれほどの人たちの話が聴けるって、けっこうすごいことです。

図書館視察・見学については、昨年は余裕がありませんでしたが、一昨年は司書資格を取るため国内各地で試験やスクーリングを受けたので、その機会に30館以上の図書館をみて回りました。憧れの浦安市立図書館をはじめ、千代田図書館、東京都立中央図書館、大阪府立中央図書館、国際子ども図書館、札幌市中央図書館など先進的な図書館も、東京・巣鴨や東大阪市の小さな図書館も。楽しく、いい勉強になりました。

秋田県立図書館も斯界では有名な図書館です。同館では「打って出る司書」ということで、県内公立図書館にいろいろな支援を行っています。先日、大館市立図書館では県立に「出前研修」をお願いして職員研修を行いました。話を聞くのではなく、ワークショップ形式で「図書館サービスを充実させる」ための具体案立案に取り組みまし

た。チームに分かれ、それぞれターゲットを定めてひとつの具体案をつくることが課題です。ほぼ全職員によるワークショップは刺激的で、限られた時間でとにかく一つの案を創り出して発表しました。遠からずそれらを形にして皆様に提供したいと思っています。

本日の結論は、内に閉じこもらずに外を見ることの大切さ、ですかね。人でも機会でも場でも。（陽）